



八束のひろは

～八束公民館報 第22号～

発行：松江市八束公民館運営協議会 〒690-1404 松江市八束町波入2060 Tel(0852)76-3663 Fax(0852)76-3669



枕木山から霊峰大山をバックに中海を望む



オダエビ ホンジョエビ メバル エノハ ゴズ ウナギ アオデ蟹 赤貝 マーカレ

写真提供：日本シジミ研究所 中海の魚介類(名前は通称)

海が再び漁業資源の豊かな海になることを願ってやみません。様々な知恵と工夫により、今以上の潮の流れを作り、中に本庄工区は、貧酸素の問題があり僅かな漁獲しかありません。これらの魚介類は未だ完全復活とはなっていません。特に本庄工区は、貧酸素の問題があり僅かな漁獲しかありません。海が再び漁業資源の豊かな海になることを願ってやみません。

アオデ蟹も思い出の一つです。干拓事業の進捗とともに漁獲が減少していましたが、私が島大に入学した昭和48年は、久しぶりに漁獲が増えたと記憶しています。夏の日の夕方、穂高岳登山を終え、野原のバス停に降り立った私は、同級生2人から蟹突きの誘いを受けました。私は、登山服姿そのままに舟に乗り、弁慶島周辺でサーチライトの灯りを頼りに、トロ箱3箱分のアオデ蟹を突きました。この年が最後のアオデ蟹の大量発生だったと思います。

その他にも、ウナギ、ゴズ、エノハ、メバル、ホンジョエビ、オダエビ等々、中海の魚介類は、中海で育まれた独特の風味があり、美味であります。干拓事業は中止となりましたが、これらの魚介類は未だ完全復活とはなっていません。特に本庄工区は、貧酸素の問題があり僅かな漁獲しかありません。海が再び漁業資源の豊かな海になることを願ってやみません。

赤貝は、中海干拓事業が始まる前の昭和40年代半ばまでは、桁引き漁で大量の漁獲があったように覚えております。我が家には「そりこ舟」と名付けられた少しばかり変わった舟があり、赤貝を海底から掘り起こすための「揺れ」を大きくする構造になっており、まさに桁引き漁のために開発された舟であったように思います。その赤貝の「殻蒸し」は、母の味として残っています。

私は、マーカレの刺身が大好きで、あの小さな魚の鱗を落とし、三枚におろして、皮を剥ぐ、その繰り返しを数十四、これを刺身醤油で食する味は、中海の最高の味の一つです。

我が家の目の前に広がる中海といえは、様々な魚介類との思い出が浮かんできます。



蘇えれ
漁業資源豊かな中海に
松江市副市長 能海 広明

池田 均 館長
(遅江)

「中海の恵み」その歴史について

池田：八束町の歴史を語るには先ず、中海の漁業の歴史を紐解く必要があります。江戸時代末期（1860年頃）の資料を見ますと、中海で八束の漁民を始め多くの沿岸漁民が漁業を営んでいましたが、漁場が狭く沿岸漁民との間で地先海面をめぐる絶えず紛争が繰り返されてきたようです。当時の松江藩は、八束の畑地は陸方農民の水田に値するものであるが、水田のように山林原野からの栄養源（ミネラル等）を有しない



池田 均 館長
(遅江)

ため、島民に畑地の肥料として海藻刈取りの権利を与えて保護していました。明治初期（1870年頃）の八束の漁業（藻類、貝類、魚類）は、藩政時代より盛んになり、中海の恵み（海藻）を享けた畑地の作物（雲州人参、養蚕、葉煙草、菜種等）とともに、八束経済の二大柱となりました。終戦直後（1945年頃）には、寒天の原料となったオゴノリ（海藻）での収入が年間1000万円にもものぼり漁民を潤していましたが、昭和24年（1949年）頃から、環境の変化等により中海の漁獲高は徐々に減少し、現在に至っています。

さて、中海・宍道湖の自然環境の再生への取り組みについて、柏木さんは「認定NPO法人自然再生センター」の正会員として活躍されていますね。



柏木 利徳さん
(入江)

「認定NPO法人自然再生センター」との連携

柏木：「自然再生センター」（以下、センター）は、中海・宍道湖の自然環境の再生と、湖と人々の親しい関係を再構築するための活動を目的に、2006年に設立されました。一方、大根島の耕作放棄地対策に取り組むことを目的に、「大根島の農漁業を考える会」を2010年に立ち上げました。お互い中海の自然再生といった共通目的で協力関係が始まりました。かつて、中海ではオゴノリなどの海藻を刈り取り、畑地の肥料や良質な



(左から) 柏木利徳さん、渡部卓也さん、豊島美紀さん、池田 均館長
[背景写真] そりこ舟漁(昭和20年代末)

寒天の原料にもなり、生き物の棲み家の役割も果たしていました。一方で、放置するとへドロ化し水質が悪影響を及ぼします。肥料として定期的に取り取ることで、中海の水質も維持され、栄養価の高い作物が収穫できる、

特集
第10回
座談会

中海に浮かぶ『豊穡の島』

大根島・江島は、中海の豊かな漁業資源や、火山灰由来の黒ボク土に恵まれ、農業では養蚕、雲州人参、牡丹の栽培で栄えた地ですが、近年は農業の担い手不足や高齢化で、耕作放棄地が増加。そんな中、再び農漁業で島に活気を取り戻そうと活動する方々にお集まりいただき、その取り組みについてお話しいただきました。

《座談会メンバー》

- ① 認定NPO法人自然再生センター正会員
大根島の農漁業を考える会会員
柏木 利徳(入江)
- ② 由志園アグリファーム(株)専務
渡部 卓也(馬遅)
- ③ 株式会社大根島社長
豊島肥糧店経営 豊島 美紀(波入)
- ④ まつえ環境市民会議副代表
八束公民館館長 池田 均(遅江)



オゴノリを刈り取る高校生たち

まさに理想的な循環を実現していたのです。今、このかつての「環境」「人」「経済」の循環を再構築することで、中海のもとから恵みの循環を、持続可能な形で次世代に残したいと考えています。こうした取り組みにあたって、中海漁協、米子高専とも連携しながら活動しています。センターは、約10年前から島根・鳥取両県との共同事業で助成金を使いながら、この取り組みを行ってきましたが、2018年度より、一般財団法人セブントイレブン記念財団から助成を受けて、「オゴノリング大作戦」事業を実施しています。



渡部 卓也さん (馬渡)

が急激に減少しました。このような現状から、地域観光資源の魅力を創出するために、伝統農業技術の継承・保存、そして耕作放棄地の再生に伴う農業景観の保全を行う必要がありました。

「由志園アグリファーム(株)」は 地域とともに

池田…本町は、代々畑作で農業を営んできており、雲州人参や牡丹はブランド商品として全国や海外にも輸出するなど、特産農業の島として皆さん頑張っておられます。由志園さんが農業法人を立ち上げられて10年を迎えられました。法人化の経緯を教えてください。

渡部…1998年に約180万本の生産量があった牡丹は、2005年には145万本、2008年には110万本に減少し、また雲州人参の作付け者数は、2000年に45人、2008年には13人にまで減少、高齢化ということもあり生産者の担い手が



雲州人参畑

そこで、地域の魅力の創出に貢献する目的で、2009年に地域特産農業の担い手を育成し、新規就農のモデルとなる経営方針を作成し、地域農業の活性化に貢献するため設立しました。

池田…私達の子どもの頃は、各集落に小売りの商店が数店あり、当時働き者で酒が唯一の楽しみな祖父から、空の一升瓶を渡され、量り売りの酒2合程度を買いに行き、お駄賃として貰った10円玉で、駄菓子を買ったことが懐かしく思い出されます。豊島肥

糧店はそれ以前からでしょうかね？営業されており、今では地域になくはないお店です。この度、お店を改装されましたが、その点についてお聞かせください。

「株ふあーむ大根島」は 高齢者とともに



豊島 美紀さん (渡入)

豊島…牡丹と雲州人参の生産者が減少していく中で、耕作放棄地が増えています。弊社は、主に湧水による水田作りをしています

が、年々作付面積も減少しています。観光がメインの島ですが、農業者が減少し景観が保たれないことを、女性目線でもかまいません。地域の高齢者は元気な方が多く、野菜作りがとても上手で、親戚や近所に配るぐらいで畑に残った野菜はそのままです。量も市場に出す程も無く、そうした農産物を出す場になればと思います「島採れマーケット」もオープンさせました。野菜が売れて生産者の皆さんの活力、生きがいになればと思います。遠くのスーパードにもなかなか行けない高齢の皆さんの意見を聞いて、様々な食品を置いています。(次頁に続く)

耕作放棄地活用の取り組み

渡部・現在、耕作放棄地対策として

「大根島そば生産組合」が中心となつて、そばを36ヘクタール耕作しています。今後ますます農業従事者の高齢化が進み、耕作放棄地が加速する現状にあつては、水田農業のように農業法

池田・次に、耕作放棄地対策についてお聞きします。この件ですが、私の家も代々農業を営んで、長年にわたつて養蚕や雲州人参、牡丹の栽培を行つてきましたが、現在は、1・2ヘクタール程の田畑の管理を農業法人や個人にお願いしている状況です。



島採れマーケット



大根島産野菜など

豊島

人や生産組合の役割が重要となりますね。

耕作放棄地で、数年前からパクチーを栽培していますが、余剰にできたパクチーを廃棄するのがもったいなくて、何か加工品ができないかと市に相談し、「まつえ農水商工連携事業」でカレー屋さん繋いでいただき「パクチーカレー」ができました。ここからカレーのレパートリーを増やし、調味料も作り昨年からはチョコレートも作り始めました。使用している野菜は大根島産で、これらの商品は大根島のPRも兼ねています。置いてある場所は空港を始めお土産品店です。カレーの中には大根島の可愛いMAPも入れており、少しでも大根島を知り来ていただくきっかけになればと思います。今後もレパートリー



大根島産野菜カレー商品

柏木

を増やし、他にはない商品開発ができればと思っています。

「オゴノリング大作戦」では、大根島の耕作放棄地を整備し、オゴノリを肥料として畑にまいて、大豆やサツマイモなど農作物を栽培し、栽培時や収穫時に参加者と一緒にイベントを行っています。現在まで、地元八束学園生や高校生、松江高専の皆さんも参加しています。

池田

耕作放棄地は八束だけではないですが、頑張っている団塊世代も70代となり、個々の対応にも限界がありますね。

私は現在、「まつえ環境市民会議」のメンバーとして環境問題の取り組みに参加していますが、ここからは、環境にやさしい循環型農漁業の取り組みについてお聞かせください。

環境にやさしい循環型農漁業

渡部・環境にやさしい取り組みとして

は、雲州人参収穫後に不要となつた人参畑の麦わらや、地元「しまねきのこセンター」から出た廃床、「大根島醸造所」から出た麦芽の搾りかす等を土壌に敷き込んでいます。また、令和元年より裏作で「大根島環境保全型農業の会」が、菜の花(21ヘクタール)の緑肥を行っています。菜の花の緑肥により、

化学肥料の使用量を半減しています。こうした農業を行うには、大根島の環境が一番適しているようです。北海道のようなミニ丘陵地に、春は牡丹や芍薬として菜の花が咲き、夏には麦の穂やそばの花が咲き誇ります。これらの花の蜜を求め、「松江養蜂組合」も参入されています。

化学肥料の使用量を半減しています。こうした農業を行うには、大根島の環境が一番適しているようです。北海道のようなミニ丘陵地に、春は牡丹や芍薬として菜の花が咲き、夏には麦の穂やそばの花が咲き誇ります。これらの花の蜜を求め、「松江養蜂組合」も参入されています。



菜の花畑

柏木

冒頭、池田館長が話されたように、中海のオゴノリは畑地の作物の肥料や寒天の原料として大変貴重でした。私達は、オゴノリを活用した取り組みをしています。今、肥料として畑地への直播や、乾燥させたペレット

池田

循環型農漁業の取り組みが、景観や畑地の作物にも良い効果となつていきますね。次に、本町は、昔から特産農家として栄えてきましたが、元来農地が狭く野菜などの作物ではロットが限

られ専業での野菜作りは難しいですね。

高付加価値製品の開発

豊島・島根大学で6次産業化の話しや、松江農林高校では魅力化授業にも参加させてもらっていますが、この先どんなことが一緒に取り組めるのか、これから模索しないといけません。観光と農業」を面白く融合させることができないかと思っています。農地の面積が限られている大根島では、付加価値を付けて販売することも大切かと思っています。「湧水、黒ボク土、オゴノリ」この3点は、その付加価値に入るとしますので高校、大学と連携していく題材にしたいですね。

渡部・大根島特有の黒ボク土で栽培した作物は美味しいと高評価をいただいています。現在、学校給食や地元スーパーにもジャガイモ等を納品させていただいています。今後、大根島の特産品になればと思っています。また、特産の雲州人参を、「安全で美味しい」を兼ね備えた商品として、島根県知事が認証する制度、島根県版GAP「美味しまねゴールド」に出願中です。

柏木・コロナ禍で中断していますが、自然再生センターでは、「中海

・宍道湖の食を広めよう会」も行っていきます。中海・宍道湖流域の食材を使った料理で、地元漁師さんから流通しにくい食材を直接仕入れ、食への関心を高めるとともに、斐伊川水系の素材を大切にしたい味は、地元の人にも新鮮な発見となるようです。



「中海・宍道湖の食を広めよう会」の皆さん

オゴノリの食用への活用策としては、「大根島産直市」が大正の頃に途絶えた「島漬け」の材料として活用し販売しています。また、寒天材料など素材としての商品化を大根島の農漁業を考える会、松江農林高校、自然再生センターで模索中です。

池田・製品の開発にあたって、教育機関など異業種連携が進んでおり、頼もしく思います。本町特産の作物栽培を継承していくには、新規就農者を育てていくこ

とが大切です。由志園アグリファームでは、経営方針の一つに新規就農モデル事業がありますが、何かお考えでしょうか。

新規就農者について

渡部・弊社設立当初からの従業員は、10年を経た現在も社員として働いています。

農業経営者が減少している中であって、新たな取り組みとして、昨年の6月に島根県・松江市・弊社で「島根県の次代を担う農業経営者育成協定」を締結しました。4月から、島根県立農林大学校卒業生2名の入社が決まりました。弊社で2年間正社員として働き、3年目には自立することが目的です。弊社での農業指導だけでなく、地域とのコミュニケーションが一番大切な



由志園アグリファーム(株)従業員の皆さん

とと思っています。松江大根島牡丹協議会、大根島雲州人参協議会、大根島そば生産組合様にもご協力いただきながら、八束農業の後継者として育てたいと思っています。

池田・牡丹農家では若い後継者が頑張っておられますが、農業全般では担い手が不足していますので、後継者が育つと良いですね。本町の農漁業の歴史を見ると、中海の豊かな漁業資源の活用や、狭い農地を生かしながら農業を営んできました。こうした先人の努力に改めて感謝したいと思います。戦後の日本、特に地方は大切な自然環境を生かせず、農漁業が衰退してしまいました。本日の対談から、令和の時代はコロナ危機を契機に、小地域から持続可能な自然を生かした、循環型社会を切り開いていくことが求められます。今回、日頃の活動の様子を直接お聞きしましたが、教育機関や行政異業種など幅広い分野との活発な交流・連携が行われており、中海や宍道島の豊かな資源を生かした地域活性化の動きに繋がっているのではないのでしょうか。一緒に頑張らしましょう。本日はありがとうございました。

◇対談は、新型コロナウイルス感染症対策に配慮した形で実施しました。

中村元博士が残した『慈しみあふれる言葉』を紹介します④

松江市出身でインド哲学・仏教学の世界的権威、中村元博士が残した慈しみあふれる言葉を、八束町中央の「八束複合施設」正面玄関東横にある掲示板で毎月紹介します。掲示内容は「中村博士自身が述べた言葉」の中から、中村元記念館の笠原愛古研究員が選び、公民館で書道を学ぶ「中央書道サークル(橘淳子代表)」のメンバーが中心となって毛筆でしたためます。



手島満智子先生(中央)を囲んで、中央書道サークルの皆さん

令和二年十二月掲示

スひとり尊い

中村元のことば

【出典・解説】
『何年何月何日にどこで生まれ、どこで生活している。独自の過去を背負っている人は、ただひとりしかいません。そこで、人間の個性も一人ひとり違ってくるわけです。』今、過去の運命を申しましたけれども、未来もやはり一人ひとりがつくります。『独自の「未来形成のはたらき」があるわけです。一人ひとりの個性は、一人ひとりの仕方で全宇宙を含んでいるという点では、まったく独自のものです。その境地に立つて初めて、一人ひとりが尊いということが言えると思います。そしてまた、それを自覚することが、人生における実践に喜びを与えてくれるものではないかと思えます。』
(中村元『人生を考える』(青土社、二〇〇〇)より)

令和三年一月掲示

過つことのな力

中村元のことば

【出典・解説】
『人はとにかく自分に都合のよいニュースだけが耳に入ってきます。口にしては悪いと思うようなことは、他人は自分に告げてくれません。そこで、いつのまにか自分は偉い人だ。賢者だと思ってしまうようになります。そうすると、人は自分だけが偉くて、他人は劣っていると思いがちになります。ここに、人間にとつての「わな」があります。自分分が愚かである、欠点がある、力が弱い、という事実を直視することによって、人は、言われなくても謙虚にならざるを得ないでしょう。そうして本当の力が出てきます。過つことのな力です。』
(中村元『仏典のことば—現代に呼びかける智慧』より)

令和三年二月掲示

傲慢になるな

中村元のことば

【出典・解説】
『われわれは、複雑な人間関係の中に生きているのであるから、当然、ほかの人びとが自分をどう見ているか、他人の評判を気にします。—ある事を企てる場合に、あらゆる他人が百パーセント賛成し支持してくれることは実際上ありません。—それにもかかわらずあえて実行するためには、—反対や非難が何にもとつているのか、その理由を詳細に知り、他人の反対意見を謙虚に耳を傾けるべきでしょう。—そうして、—それらの反対理由をいかにして解決しようかをじっくり考えて実行すべきでしょう。—お釈迦さままでさえ非難された、と思えば、他人から何か言われても、腹の立つことはないでしょう。』
(中村元『仏典のことば—現代に呼びかける智慧』より)

令和三年三月掲示

自分で決定する

中村元のことば

【出典・解説】
『われわれの人生の行路は、何らかの意味で理想を目指す一筋の道です。—しかしその目標は何かということになると、人によって具体的な内容はかなり異なるでしょう。また努める人の素質や能力も千差万別です。—道理とか理法とかいうものは、ことばによって他人に伝えられ説かれるものですが、—その人だけが行動を決定し決断すべき独自の生活場面というものがあります。—自分自身だけが決定せねばならぬことであるからこそ、絶えず自ら反省し、謙虚に他人の意見を傾聴し、他人の美点に注意しなければなりません。—自らの愚を知って慎重に考慮するが、最後に決断を下すものは自分なのです。』
(中村元『仏典のことば—現代に呼びかける智慧』より)

あとがき

大根島④ 「根本」

八束町には、中村元博士の業績を全世界に発信している「中村元記念館」(2012年10月開館)があります。

当記念館の設置が大根島に決まった理由の一つに、中海圏域の中心に位置する立地の良さや、小高い丘(大塚山公園)から眺めた中海の夕暮れ時の情景が、博士が愛したインド・ガンジス河畔と重なったとも聞きます。

私は、当記念館館長の前田専学東京大学名誉教授が、開館の挨拶で述べられた言葉が今も心に残っていますので紹介します。
『…大根島の大根は、ものの根本中の根本、すなわち中村元の元を意味し、将来中海圏域の連携・発展の根本となり、元となり、その象徴となることを願っている。良い場所に記念館ができ博士もお喜びである。』
(池)